

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2026.9.30

VOL.

176



板屋谷内C6号墳出土品
(高岡市五十里)

こはくせいまるだま
《琥珀製丸玉》(径1.0cm)

丸玉は、いわゆるビーズの一種です。ネックレスにしたり、布に縫い付けて飾りとして使ったりしたと考えられます。ガラス製や琥珀製があり、写真の丸玉は琥珀製です。日本の琥珀の産地は現在、北海道石狩市の望来海岸、岩手県久慈市周辺や福島県いわき市、千葉県銚子市などが知られています。この丸玉は、久慈産か、いわき産の可能性が高いものです。今は時を経てくすんだ茶色をしていますが、古墳時代には透明なオレンジや黄色の美しい輝きを放っていたことでしょう。

とっておき埋文講座①●とやまMAIBUNクエスト2026

②●〈発掘調査速報〉水橋小出遺跡の発掘調査から

埋文あらかると●博物館実習

Center Flash●令和8年度特別展「富山県からのお知らせ 転入・転出 ～富山県民を作り上げた人たちの足跡～」

古写真発掘！●南原D遺跡 南砺市南原（城端町）

富山県埋蔵文化財センター

とやまMAIBUNクエスト2026

とっておき埋文講座①



はじめに

今回から「とやまMAIBUNクエスト」と名を変えた夏休みイベントは、県内の小学生とその保護者を対象として、「考古学体験教室」「こども考古学講座」「まいぶん研究室」の3本立てで様々な活動を実施しました。

本事業は、埋蔵文化財に関する体験活動を通して、考古学や文化財への関心を高めることを目的としています。また、子供たちが夏休みに取り組む自由研究の一助になっています。



考古学体験教室

県内の小学4～6年生とその保護者を対象として行いました。人気のある刀鍛冶体験や染物体験、大型勾玉づくり体験を含む全6教室22コースで開催しました。県内全域から延べ900組を超えるご応募をいただき、期待の高さを実感するとともに、夏休みの楽しい思い出の1ページになるようにと願いながら準備を進めました。

それでは、各教室の活動内容をご紹介します。

○刀鍛冶の体験をしよう

(ペーパーナイフ)

「鍛冶」とは、鉄を鍛錬して刀や鋏などの製品を作ることです。800℃近くまで熱して赤くなった五寸釘を、「鉄は熱いうちに打て」の言葉どおり、熱しては叩き、熱しては叩きを繰り返して刃を作ります。そして、作った刀(五寸釘)を一気に水に入れて冷やす「焼き入れ」を行い、強度を高めます。最後

に、砥石で刃先を鋭く研ぎ、柄を作って仕上げます。

丁寧に研いだペーパーナイフで試し切りをすると、切れ味のよさに子供たちの驚きと喜びの声が上がりました。



○古代の鏡の鑄造を体験しよう

(錫鏡)

「鑄造」とは、溶かした金属を型に流して型と同じ物をつくる技法です。今回つくる鏡の原型は、射水市の上野遺跡から出土した弥生時代の内行花文鏡で、中心に花のような内側に向いた6つの文様があります。

初めに、鑄物砂を押し込んで型を造ります。次に、溶かした錫を型に流し込み、冷やして固まったら、鏡の表面を砥石や耐水ペーパーで磨きます。

ざらざらだった面が滑らかになり、輝きを増していくに連れて、子供たちはもちろん保護者の皆さんもさらに熱心に磨き上げていました。



○縄燃りを体験しよう

(草木染のストラップ)

縄文時代の縄は、樹木の皮や植物の茎などからとった繊維を燃って作られましたが、今回は当センター職員が染色した草木染の木綿糸を使います。

初めに好きな色の糸を選んで燃り、

縄を作ります。燃りは慣れるまでは大変でしたが、保護者の皆さんと協力して辛抱強く縄を作りました。

次に、縄を結んでいき、ストラップを作ります。螺旋状のきれいな形ができ始めると、より一層夢中になって制作していました。



○フルミの垂飾づくりを体験しよう

(フルミのペンダント)

縄文人とほぼ同じ方法でフルミの殻を割ったり、削ったり、穴をあけたりしてペンダントを作ります。

初めに、フルミの殻割りに挑戦しました。初めて扱う叩き石は力加減が難しく、苦戦していましたが、徐々にコツを掴んできれいに割ることができました。次に、砥石で横断面を削りました。徐々にきれいな模様が現れ、歓声が上がりました。最後に、できあがったペンダントに漆を塗りました。鮮やかな光沢が出て、すてきなペンダントに仕上がりました。



○染物を体験しよう

(藍染エコバッグ)

藍の色は「ジャパン・ブルー」と呼ばれ、日本を代表する色として世界中にも知られています。

無地のエコバッグにビー玉やクリッ

ブ、輪ゴムなどを取り付けます。それを藍液に漬け込んで染色すると、鮮やかな藍色の中に白めきの模様が表れます。思い描いた通りの模様が浮かび上がると、嬉しそうにバッグを見せてくれました。



○大型まが玉づくりを体験しよう (滑石製大型まが玉)

まが玉づくりは当センターの看板体験メニューの一つとして行っていますが、この教室では通常体験で使う石の2倍サイズのものを使います。

使用する石のサイズが大きい分、時間も労力もかかりますが、完成品の迫力に喜びもひとしおです。ぜひ通常体験でのご参加もお待ちしています。



こども考古学講座

講義では、考古学とは何か、またその研究方法、発掘調査や調査後の整理作業、さらに博物館の仕事などについて学びました。

出土品に触れる体験では、遺跡から出土した本物の土器や石器に実際に触りながら、そのつくりや文様、使い方等を学びました。

館内見学では、初めて見る収蔵庫の広さやそこに保管されている遺物の数の多さに、子供たちは驚き、ロッカーの中を見たり、撮影したりしていました。

活動では、拓本作りと公文書館とのコラボ企画「昔の文字を読み書きしよう」を行いました。和紙に黒く土器の文様が浮かび上がったり、自分の名前

を昔の文字を使って書くことができたりすると、子供たちは嬉しそうでした。

子供たちは、これまであまり馴染みのなかった考古学に興味・関心をもったようでした。



まいぶん研究室

当センターでは、毎年夏休みに来館する小学生やその家族を対象に「まいぶん研究室」を開設しています。今年度も、考古学や埋蔵文化財について関心を高めたり調べたりできるコーナーを設置しました。

○「タッチ・ザ・DOKI」と 遺跡地図閲覧コーナー

市町村・校区別の遺跡地図とふれる標本箱「タッチ・ザ・DOKI」を置き、県内各市町村にある遺跡と、そこから出土している土器について自由に調べられるコーナーです。身近にある遺跡から出土した土器に触れることで、考古学への親近感がわいた人もいたようです。



○叩き石体験コーナー

縄文人が実際に使用していたくぼみ



のある石(くぼみいし)にドングリをセットして叩き割った後、実を取り出してすり石で粉状にします。ドングリの補充が間に合わないくらい人気のコーナーでした。

○縄文土器の接合に挑戦!

2種類の縄文土器の土器パズルを用い、土器の接合を体験してもらうコーナーです。ピースの形はもちろん、文様の特徴をじっくりと観察しながら組み立てていました。



○貝合わせ(貝覆い)に挑戦!

平安時代の貴族の遊びである貝合わせ(貝覆い)を体験してもらうコーナーです。トランプの神経衰弱のように対になる貝殻を見付ける遊びで、貝殻の大きさや模様をヒントに對の貝殻を探していました。



終わりに

今年度も多くの方々にご来館いただき、体験や展示見学、クイズを楽しんでいただきました。ありがとうございました。参加された皆様に笑顔で「楽しかったです」「また参加したいです」と声をかけていただき、励みとなりました。アンケートでも肯定的なご意見を多数いただき、大変嬉しく思います。

次年度も皆様からのご意見を踏まえ、より一層子供たちに楽しみながら歴史や考古学に親しんでもらえるような活動の企画・運営に努めて参ります。たくさんのご参加をお待ちしております。

(金谷 奉賢)

〈発掘調査速報〉 水橋小出遺跡の発掘調査から

とっておき埋文講座②

(公財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査課 副主幹 新宅 茜

国営農地再編整備事業

富山市水橋地区では、農作業の効率性や生産性を高めるために、現在の水田を大区画化したり、用排水路や農道を整備する工事が国営農地再編整備事業として行われています。この事業の対象となる水田の下には数多くの遺跡が眠っており、そのうちのひとつである水橋小出遺跡を調査することになりました。

水橋小出遺跡は白岩川と上市川に挟まれた水田地帯の中にあります。調査を行ったのは幅約3～5m、長さ約500m。用排水路整備部分ですので、道路と宅地と農道に沿って曲がりくねっているのですが、どこを調査したのか、下の写真からわかるでしょうか?? (写真中央右側の工事箇所ではありませんよ…)



縄文時代

調査では縄文時代後期～晩期、弥生時代中期の遺構や遺物が見つけられました。

縄文時代後期の川跡からは、足の踏み場もないほどの縄文土器片が出土しました。写真①はその一部です。幅の狭い調査区の

端を横断する川跡のみが見つかったため、周辺の状況はわかりませんが、近くに集落があったのだと思います。

また、縄文時代後期の石器製作の作業場かと考えられる跡が見つかりました(写真②)。作業場跡は直径6mの円形で、調査区の外に続いています。磨製石斧や打製石斧、石鏃、玉、これらの材料となる石材や、製作時に使用した砥石や叩き石、飛び散ったと思しき破片なども合わせると200点以上の石製品が出土しています(写真③・④)。付近からは土偶の頭部が見つかりました。縄文時代晩期の東北地方を中心に広がった「亀ヶ岡文化」を代表する「遮光器土偶」を真似たシンプルな両目が印象的です(写真⑤)。



遺跡上空から立山連峰を望む

弥生時代

弥生時代中期では、土坑や溝、川跡などが見つかりました。

土坑は直径2～3mの大型のものがみつっています。写真⑥の土坑は、奥に見える同規模の土坑と並んでいるのが特徴的です。

溝では弧状を描く大きな溝が見つっています。幅約3mほどですが、調査区内での長さは17mにもなります。調査区の外に延びるので、この溝の正体についてはわかりませんが、管玉に加工している途中のものや石材などがみつかりました（写真⑩）。玉作りに関連する出土品は小指の爪大のものが多く、手で掘っていても見つけることが難しいので、溝の埋土はすべて持ち帰り、土壌洗浄を現に行っているところです。

その他には石鏃、扁平片刃石斧、石包丁、砥石なども出土しています（写真⑧・⑨）。

今回の調査では、住居や建物といった人々が暮らしていたところを直接見つけることはできませんでしたが、川の水際に大量の弥生土器が廃棄されており（写真⑦）、近くで生活していたことを窺わせます。

縄文時代後期には石器製作、弥生時代中期には玉作りと、モノづくりに取り組んだ人々が暮らしていた場が、風にそよぐ広大な水田地帯の下のどこかに、まだ眠っているといえるでしょう。

（令和8年9月6日

第2回 県民考古学講座）

〈縄文時代〉



〈弥生時代〉



埋文 あらかると

博物館実習

博物館実習は、学芸員資格の取得を目指す学生に対して行う実地研修です。

当センターでは毎年、博物館に関する人材育成や博物館活動の普及を目的として、地元の大学生を中心に実習生を受け入れています。今年度は7月28日(火)～8月6日(木)のうち8日間、6名の学生を対象として実施しました。

実習内容は、秋から開催する特別展のポスター・チラシ案作成、展示学習教材の作成、夏休み親子体験教室の指導など、多岐にわたります。

秋の特別展「富山県からのお知らせ 転入・転出 ～富山県民を作り上げた人たちの足跡～」のポスター・チラシ案は実習生一人ひとりがアイデアを出し、その中から二人の案を合体させたものになりました。



実習生たちは、展示の内容をどう表現するか、展示タイトルを縦書きにするか横書きにするか、文字の大きさをどうするかなど、他館の展示ポスターなども参考にしながら、案を考えていました。

展示学習教材は、特別展のテーマである富山の転入・転出について、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳



時代、古代、中世、近世、近現代に起きた出来事を紹介するアニメーションの作成です。学生達が普段使い慣れているパワーポイントで作りしました。

各時代の人々が役所に届出を出しに来るというストーリーを作り、それに必要な背景や人物を挙げていきます。役所の受付は共通にして、時代の違いは背景の色で表しました。人物は画風を統一するため、イラストが得意な一人が担当しています。他の皆は、それぞれの時代を分担し、最後に一つにまとめました。



完成した二つのアニメーション「その1：富山に来た人、富山を出た人」「その2：富山を中心とした人々の出入りの歴史」は10月9日(金)から開催する、特別展(詳細はp7)で、ご覧ください。



体験教室は県内の小学4～6年生の親子を対象とした夏休み企画で、「古代の鏡鑄造を体験しよう」の指導を行いました。指導案の作成や実践を通じて体験内容の理解を深め、さらに子ども達に楽しく学んでもらうための声掛けや、注意等についても学びました。

指導は三人一組となり、説明する人、実演する人など分担して行いました。実習生たちからは「説明がわかりにく

くなってしまった」「声が大きく出せなかった」「なかなか声掛けができなかった」など反省点が多く上げられましたが、体験者の方々には概ね好評でした。



鏡の鑄造体験は火を使用するため、屋外で行われます。屋根がついている場所とはいえ気温が高く蒸し暑い中、実習生たちは汗だくになりながら指導や声掛けを行っていました。



来年度の実習実施要項は、1月にホームページ上で公開する予定です。

(青山 裕子)

令和8年度 特別展

「富山県からの 転入・転出」

～富山県民を作り上げた人たちの足跡～



記念講演

令和8年 10月18日 13:30～

古代ゲノム解析から探る 人間集団の軌跡

講師 覚張 隆史 氏
（金沢大学古代文明・文化資源学研究所 准教授）
会場 ▶ 当センター会議室

令和8年 11月15日 13:30～

青谷上寺地遺跡と四隅突出型墳丘墓 －弥生時代の日本海側の交流－

講師 家塚 英詞 氏
（鳥取県立青谷かみじち史跡公園 係長）
会場 ▶ 当センター会議室



みなみはらでいー

南原D遺跡

昭和48年（1973年）撮影 南砺市南原（城端町）

（立野ヶ原遺跡群 第2次調査）

前回に引き続き立野ヶ原遺跡群の中から紹介します。立野ヶ原台地上には多くの遺跡があり、立野ヶ原遺跡群緊急発掘調査では、「南原」の地名が付く遺跡だけで13遺跡も調査されました。また、立野ヶ原には多くの旧石器時代の遺跡があり、南原D遺跡もその一つで標高約190mの台地上にあります。

上の写真は、南原D遺跡の全景を南から撮影したものです。調査の結果、硬質頁岩系の柳葉形尖頭器や鉄石英製の有舌尖頭器、三角鏃などが出土しました。

下の写真は、「西側ユニット」と報告されたユニット（石器がまとまって出土したところ）を調査している様子です。



南原D遺跡出土石器

編集後記

今話題の美術展のコラボグッズが、インターネットで予約ができるということで、販売開始5分前にショップサイトに繋いでみました。するとショップに繋がるのを待っている人数がすでに1,760人、推定待ち時間は1時間との表示。推定時間よりちょっとオーバーしてようやくショップに繋がりましたが、目当ての物はすでに在庫切れ。自宅にいただけでしたが、ちょっと疲れた一日となりました。

（担当 青山）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.176

令和8年9月30日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814

URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

